



山の危険に対する誤解

農学部 川窪 伸光

「山を独りで歩くなで危険ではありませんか」としばしば問われる。

私は野生生物の研究をしている。だから山を歩きながらの生物観察は私の喜びであり、仕事の要なのだ。研究のためとなれば、独りで、それも春夏秋冬、昼夜を問わず山にわけ入る。また珍しい生物に出会いたくて、世界中、灼熱の砂漠から、混沌のジャングル、氷河を抱く高山に至るまで、機会さえあればどこへでも出向く。

そんな話をすると、「怖くないのか」と問われるのだ。どうも山歩きには般に「危険」がつきものだし、つまり、迷ったり、滑落したりする、遭難はもとより、「危険な動物」に襲われたり咬まれたりして、生命を脅かされるのではないかと心配されるのである。「山には危険がいっぱい」といつ訳だ。

確かに、かれこれ三十年も山をうろついていれば、迷ったり滑落したりして、一時的に動けなくなることもあった。でも、冷静でありさえすればいつか帰ることが出来る。とにかく急いだり、あわてたりしないことだ。「遭難」は自らかかってくるもので、自然現象ではない。甘い予測の上に、バックが重なって生じる。迷うことも滑落することも、山歩きの中に、あらかじめ織り込んでおくことだ。おかげで今も生きとじている。

専門が生物学であるためか、「野外における危険な動物」に関する質問は頻繁だ。ヒグマに出会うたら「マムシやハチ」に咬まれたら、「みなさんの心配はつきない。でも正直言うてなかなか出会えない。」「ヒグマが気づく前に、多くの野生動物は私に気づいて、さっさと逃げることができる。用心にこしたことはないが、日本国内ならまず、心配はしていない。」

甘くみてはいけないのは、蜂である。日本国内はもとより、世界中で、「やや危険な」動物は、間違いなく毒針をもつ蜂である。日本でも、毎年、何人もの方が蜂に刺されて亡くなる。人によっては、刺されると激しいアレルギー反応に襲われるからだ。しかし、これも考えようである。登山(野外活動)人口からすれば、死亡率は無きに等しい。

では、野外において、「もっとも危険な」動物とは何か？
非常識な答えに思えるかも知れないが、それは、「人間」である。

悲しいことに、私の知り合いの研究者の何人かが、野生生物調査中に命を落としている。なんと、ほとんどが交通事故死である。飛行機の墜落、調査船の沈没。自家用車での谷への転落。恐ろしいことに、他の生物によつてではなく、たとえ野外においても、私たちは自らの社会的システムによつて命を落とすのである。不運といえば、それまでだが、事故の背景には、人間の判断ミスが存在する。そのミスは、亡くなったご本人のミスでない場合もあるから、やりきれない。

実際、日本だけでも年間一万人を遙かに超える人々が交通事故によつて亡くなるという。自らの無謀運転が原因ではなく、歩道を歩いていて、事故に巻き込まれる場合さえある。人間は、自らの保護する道具(武器も含めて)を手にしたリ、自動車のような金属の殻で、自らを硬く包んでしまつて、限りなく凶暴になり、いかなる野生動物よりも危険になる。そして、危険を察知する生理的感覚を失い、危険な物、場所を誤解し、便利と安全とを履き違える。

人間を生物学的に観察して、そう思う。

だから私は、最初の質問に、「どう答えていい。」
「実は、山を独りで歩くほど安全なことはいないのですよ。」